

# 障害者の暮らしの場

②

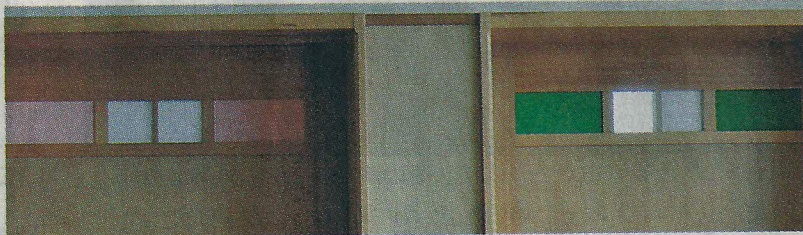
埼玉県白岡市にある入所施設「太陽の里」。知的障害のある人62人が約10人ずつ6グループに分かれて生活しています。

「当たり前前の暮らしが実現することをめざしています」。こう話すのは、園部泰由施設長です。

## ■検討会を重ね

各グループにトイレ、風呂場が設置され、中央にゆったりとした食堂兼リビングを配置。キッチンも整備されています。メインの厨房(ちゅうぼう)でつくられた料理はここで温められます。食事時にはそれぞれのグループからおいしそうな香りがただよってきます。職員がキッチンに立ち、入所者は配膳などを手分けして行います。いずれは、各グループで食事をつくることを目指しています。個室のドアにはめられた

タイルは誰もが自分の部屋とわかるように、色やデザインがすべて違います。個



個室のドアのタイルの色・デザインはすべて違うものにしてあります

## 知的障害 入所施設

# 個室で自分ペース

室で過ごせますが、こもる人はあまりいません。金魚などの世話をする、コーヒーをいれてゆっくり飲むなどリビングでのんびりくつろぐ姿が見られます。

「太陽の里」は1992

年、開所。2010年からみんなでイメージ図を描いたり、展示場を見学するなど、施設改修の検討をはじめました。園部さんは「検討会を重ねることに、自分のことより仲間の暮らしや



各グループの中央にある食堂には、キッチンが整備されています

すさを考える意見が多く出るようになった」と振り返ります。11年11月、新たな暮らしがはじまりました。

「具体的に自分たちで考えて改善し個室化したことで、仲間が自分のペースで暮らせるようになった」と園部さんはいいます。行動障害のある人は改修前と比較すると、落ち着くようになりました。

## ■気持ち安定

入所者の一人、松山真由美さん(41)は改修前まで、朝すくに起きることができませんでした。いまは毎朝、キッチンで職員とともにグループのみそ汁をつくるのが日課となっています。

仲間は松山さんに「おいしかったよ」と声をかけるように。園部さんは「仲間同士コミュニケーションをとるのは難しい。ここではみんなで暮らしをつくる環境ができていて、その仕組みをきちんと理解している職員が間に入るので、コミ

ユニケーションが取れるようになってきている」と強調します。

高橋創さん(47)の母親、三枝子さん(76)は「個室でゆったり暮らせるようになり、息子が身につけていないと気持ち安定しない腕時計を今は必要ないと机の引き出しにしまっているんですよ」と目を細めます。全国の小規模作業所など

でつくる「きょうざれん」によると、障害者の独立した生活を支える条件が整っていないため、障害者の70%が家族支援に頼らざるを得ません。家族に過度の負担がかかり、介護殺人などの悲劇が後を絶ちません。園部さんは「障害の種類や程度によっては、グループホームやケアホームでは医療的ケアなど必要な支援が不十分なこともあるだろう。障害者の権利保障しながら一人ひとりが生き生きと暮らせる場が必要だ」と話し、入所施設の必要性を強調します。

(つづく)